

福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	平成27年度学術委員会学術小委員会・山本則子氏講演会報告
Author(s)	佐藤, 郁美; 中山, 仁
Citation	福島県立医科大学看護学部紀要. 18: 35-36
Issue Date	2016-03
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/507
Rights	© 2016 福島県立医科大学看護学部
DOI	
Text Version	

This document is downloaded at: 2024-07-25T00:55:19Z

学 術 活 動

平成27年度学術委員会学術小委員会・山本則子氏講演会報告

看護学部学術小委員会委員 佐藤 郁美・中山 仁

本委員会では、将来を担う若手あるいは研究歴の浅い研究者の育成・支援を通して、看護学部の研究活動の活性化を図ることを目的に、例年外部講師による講演会と、学部内での研究交流会を開催している。以下は、本年度の活動の一つとして開催した山本則子氏（東京大学大学院医学系研究科教授）による講演会の報告である。

テ ー マ：研究者と実践者が共同して行う事例研究の提案
講 師：山本 則子 氏
日 時：平成27年 8月25日 15時～16時30分
場 所：S 601教室
参 加 者：本学看護学部教員，附属病院看護師，大学院生 32名

講演内容：

臨床研究とはもともと事例研究でした。1960～70年代にかけて看護研究は科学的であるべきという考えが主流となり、研究に客観性が求められるようになったのです。そのため事例研究は研究の前段階という評価が与えられ、今に至ります。

しかし、看護師の仕事は事例の積み重ねであり、個人の経験の蓄積を共有財産にするためにも、私は事例研究の理論的一般化を目指したいと考えました。経験を共有するためには言葉（概念）が必要ですが、自身が今まで行ってきたグラウンデッドセオリーアプローチでは看護師の細やかな実践行為が抜け落ちてしまいます。そのため、看護実践を説明する「言葉づくり」を意識した方法で事例研究を行うことにしたのです。このような事例研究を進めるには、看護師は実践者として自身の行った実践行為を言語化する必要があります。研究者は対話によって実践者が直感で行った行為の意識化を手助けする必要があります。語られた実践行為を実践者と研究者が共同でまとめ、学会発表、論文へつなぐことで実践行為が知識となり、看護の共有財産にすることができます。研究者は実践者を支援しますが、あくまで対等なパートナーとして、お互いの得意な部分で補い合いながら進めていく必要があります。研究者が実践者を指導して研究論文を作り上げるものではありません。

事例研究を新たな研究方法として確立するため、現

在、訪問看護師や病棟に勤務する看護師と共同し実践事例を積み重ねているところなのです。

【講演内容またそれに関連した質疑応答】

Q：事例研究を行う場合、実践行為の対象となった患者やその家族に承諾をとることは可能でしょうか。患者がすでに退院している場合や残念ながらお亡くなりになってしまった場合などもあると思うのですが。

A：現在行っている研究に関しては、全て患者またはご家族に連絡をとり承諾を得ています。大学の倫理審査も通しています。患者やご家族から承諾を得られなかった場合は事例として取り上げておりません。

Q：山本先生の講演を拝聴し、看護師の当事者性を汲み取り今まで行った看護実践について振り返りながら事例を検討するというのが、現在山本先生の行っている事例研究ということがわかりました。私は修士論文の指導に携わっておりますが、研究者である大学院生が、フィールド先の看護師の行っている看護実践に介入していくことがあります。そういうことを事例研究と捉えていました。先生は包括的に事例研究がどう捉えられると考えていらっしゃいますか。

A：研究者にとって事例研究の定義はいろいろあると思います。（質問者の行っている）前向きな事例研究も、私が行っている後ろ向きな事例研究もあってよいと考えています。私が今行っている事例研究に関しては、看護師が個別に実践したことを1つのケースと捉えています。

Q：病棟で働く看護師も山本先生も忙しいと思うのですが、どのようにして研究の話し合いの時間をとっているのでしょうか。また病棟看護師の研究に対するモチベーションを保つにはどうしたらよいとお考えでしょうか。

A：研究に協力していただいている看護師たちが忙しいときには、無理に急かさず待ちます。またこちらの研究に対する熱意を見せ、看護師が行っている看護実践に対する考えや、そのときなぜそのような看護行為を行ったのかを丁寧に聞き取ります。研究をまとめる際

は、いきなり研究論文を目指すということではなく、まずは院内発表、次は院外、そして論文というようにステップを踏んで自信をつけていくことが大切だと考えています。